「まちカフェ」に学ぶ地域拠点のつくり方

2030年、訪日6000万人時代へ。地方分散の鍵は「ハコ」ではなく、その土地に生きる人々の「熱量」だ。ゼロから目的地をつくり、定番の景色を塗り替え、街の価値を翻訳する—それぞれ異なる4つのカフェ事例が積み上げてきたものから、次なる地域拠点づくりのヒントを探る。

撮影／今井聡志、鈴木暁彦（アトリエあふみ）

カフェ2階には、菊地さんこだわりの大テーブルが。人が自然に交わる“場”の象徴であり、ひとりでも心地よく過ごせる

旅人がやってくるカフェが辿ったプロセスとは？

Case 01

はじまりはアパートの2階から一軒のカフェが、黒磯の名物ストリートへ

栃木県・那須塩原市

1988 CAFE SHOZO（カフェ ショウゾウ）

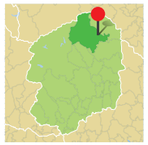
原点 なぜこの街の、この場所で産声を上げたのか

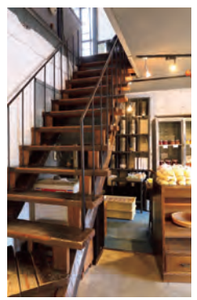
新しくて、どこかレトロ。那須塩原市の黒磯エリアには一軒のカフェを中心に人々が集まり、名物となったメインストリートがある。

その始まりは1988年。黒磯駅からほど近い街道沿いのアパートの2階で、「1988 CAFE SHOZO」は静かに産声を上げた。創業者・菊地省三さんがこの街を選んだ理由は、驚くほどシンプル。「ここが生まれた町だから」。高校卒業後は横須賀の海上自衛隊へ。4年間の勤務を経て、やりたいことを模索する中で22歳の時に「27歳までにカフェを開く」と心に決めたという。「カフェの修行も兼ねて心の赴くままに東京や北海道へ。焙煎に挑戦したり、流氷の上で珈琲を飲んだり…やりたいことは全部やってみました。でもそこでの暮らしを経て、自分が関わる人の数は結局どこに住んでも変わらないんだなと気がついて」と笑う。ならば自分の感性が最も自然に呼吸できる場所で。そうして生まれ育った黒磯でカフェを開くことを決めた。

SHOZO STREETの中心「1988 CAFE SHOZO」。黒磯駅からは歩いて10分、平日でも多くの人が訪れる

㊟栃木県那須塩原市高砂町6-6
☎0287-63-9833
営11:00-18:30 休第1木曜





カフェスペースの2階へと誘う階段。特別な日常がここから始まる

自立 ビジネスとして継続させるための「経営の決断」

地元での開業を決めたものの、当時の資金は退職金50万円だけ。菊地さんは運送会社で2年半働き、開業資金を貯めた。そして27歳の誕生日まで残り1カ月、現在の物件に偶然出会う。「店舗を2階に構えることは最初から決めていました。階段を上がるワクワク感、窓から見える街の景色の心地よさ…北海道や下北沢で訪れた印象的なカフェの記憶です」。旅人としての体験が、店づくりにそのまま息づいているというわけだ。こだわりはもうひとつ。カフェの真ん中に置かれた大テーブルだ。小学校の図書館で、テーブルを囲んで過ごした記憶が、〝人が自然に交わる場〟をつくる原点になったからだという。1988年6月にオープン。菊地さんの理想が詰まったカフェは人々の心をつかみ人気店となる。

創業当時から愛される珈琲とスコーン。外はサクッ、中はふわっとほどける食感。珈琲との相性は抜群だ

多くの人を魅了するのは菊地さんの描く世界観と居心地のよさ。アンティーク調の家具と席がゆったり配置され、自分だけの空間に浸りやすい

波及 一店舗が、いかにして街に変化を及ぼしたのか

小さなカフェとして始まった「1988 CAFE SHOZO」。開業から数年のうちに、黒磯の街に静かな変化をもたらし始める。店の前を行き交う人が増え、週末には県外から訪れる客も現れた。「カフェには人がきてくれるようになったけど、果たしてそれだけでいいのか。多くの人が来たいと思う街にするにはどうしたらよいのかと考えるようになりました」と菊地さん。いい街には必ず〝通り〟がある。1軒だけではそこで終わってしまうが、2軒、3軒とふらりと立ち寄れて時間を過ごせる場所が並んでこそ、人は歩き、滞在し、街に流れが生まれる。そこで菊地さんは「旅人が来たい街」を掲げ、まず雑貨店、アパレルショップを自らつくった。するとSHOZOの空気感に共鳴した人たちが、自らこの場所を選び、店を構え始めたのだ。「気づいたら、まわりに店ができていた。今は古本屋や花屋、ギャラリーなど約20店ほど通りに並びます」。こうして生まれた通りは、いつしか〝SHOZO STREET〟と呼ばれるようになり、黒磯を訪れる人々の目的地となった。

左／焙煎所。菊地さんは35年焙煎を続け、最高の一杯を完成させるため今なお探求中。完成は目前だとか　右／音楽室や農産物直売所から生花店、アクセサリーショップまでおしゃれで個性的な店が揃う。通りに魅せられ、県外から通うファンも多い

未来 10年後の街の風景を今、どう描いているか

通りには今も新しい店が生まれ、訪れる人は思い思いに歩き、滞在し、時間を過ごす。

カフェの開業から30年以上が経った今、菊地さんの視線は〝これからの黒磯〟に向けられている。「これまでは旅人が来る街を目指してきました。次のテーマは〝住みたくなる街〟です」。

旅先として選ばれるだけでなく、ここ黒磯に暮らしたいと思う人が増えること。それが、次の10年に描く風景。旅人が歩きたくなる「ストリート」が、次は暮らしを選ぶ理由へと繋がっていく。

新たな地域拠点づくりのヒント

- 「1988 CAFE SHOZO」が生まれたのは、かつてのシャッター街。「何もないからこそ、新しいことができる」という菊地さんの信念が街の未来を塗り替える起点に。
- 一軒のカフェに心惹かれた人々が黒磯を訪れ、自ら店を構え始めた。共鳴によって店が増えていくプロセスこそ、地域拠点が育つ自然なかたち。

Case 02

日常の暮らしにそっと「栞」をさす松本に息づくサードプレイス

長野県・松本市

栞日（シオリビ） siori-bi

原点 なぜこの街の、この場所で産声を上げたのか

歴史ある城下町の風情と北アルプスの山々に囲まれた松本市。静岡県で生まれ育った「栞日」オーナー・菊地徹さんが、この街で店を営むまでにはいくつかの物語がある。

大学では国際関係学を専攻。しかし学びを深めるほどにグローバルなスケールの大きさに違和感が募っていった。そんな時期に出会ったのが、カフェでのアルバイトだ。「人々がふらりと訪れ、いつもの席で、一杯の珈琲を楽しむ。日常の小さな変化に寄り添い、気分を少しだけ上向かせるような時間をつくる。目の前のひとりの幸せに寄り添うことの方が、自分の性に合っていると感じました」と菊地さんは笑う。

カフェ＝地域のサードプレイスをつくろう。その想いを胸に各地のカフェを巡り、「この街で暮らし続けたい」と思える場所を探した。就職がきっかけで訪れた松本を選んだ理由も、理屈ではなく感覚に近い。古い建物が息づき、個人店が自分の世界観を大切にしながら街に点在する。移住者も自然に受け入れる空気が、この街にはあった。2013年、菊地さんは松本の古いビルを借りて「栞日」を開いた。

珈琲を飲みながら気になる本を手に取ることができる。秘密基地のような気分で好きな席でのんびり寛げる

ガラス張りの店舗は道行く人もふと足を止める。地域の人はもちろん旅人も訪れやすいよう、店舗の場所は駅から徒歩10分圏内にこだわって選んだ。7時オープンでモーニング利用も可能

㊟長野県松本市深志3-7-8
☎0263-50-5967 ㊐7:00-20:00 ㊡水曜

自立 ビジネスとして継続させるための「経営の決断」

開業当初から菊地さんには、「カフェという業態にこだわらず、サードプレイスをつくる」という明確な軸があった。その原点には、カフェを巡る旅で出会った独立出版の本の存在も大きい。「本屋をやるつもりは全くありませんでした。けれども、気がついたら集めていて」と菊地さん。大量生産ではない、小さな本の息づかいに惹かれた経験もまた、栞日の事業の核となっていった。やがて本を中心に据えた空間づくりは、単なる〝本屋＋カフェ〟の枠を超えていく。開業3年後の移転では、大規模リノベーションを実施。旧店舗は宿泊施設「栞日INN」として再生し、旅人が街に滞在する理由をつくる場所へと役割を変えた。「業態は違っても、根っこにあるのはサードプレイス＝誰かの居場所づくりなんです」。こだわりの珈琲と本。栞日を訪れた人々はつかの間の非日常を楽しんでいる。

珈琲はオープン当初から変わらず、京都〈KAFE工船〉から。オリジナルの「栞日ブレンド」とシナモンドーナツで一息

焼き菓子を担当するのは旅館で働いていた時に出会った奥様。スコーンやドーナツ、チーズケーキなどが並ぶ

波及 一店舗が、いかにして街に変化を及ぼしたのか

冬は観光客が減り街全体も静まり返る。菊地さんは「地域とともに生きる」必要性を強く感じたという。そこで近隣の店に声をかけ、冬のスタンプラリーを企画。「まずは自分から動いてみようと思いました」。この小さな試みが、地域との関係を結ぶ最初の一歩に。松本の個人店は、〝一匹狼気質〟ながら、互いの表現を尊重し合う文化があるという。距離を保ちながらも協力しあい、街全体で文化を育てていく。

その関係性の延長線上にあったのが、店の向かいにあった100年以上続く銭湯「菊の湯」の事業継承だ。

「三代目から閉めるという話を聞いて。毎日、時間になるとおじいちゃん、おばあちゃんが集まってくるのが店から見えていた。この場所はなくしちゃいけないなと。銭湯も、街の暮らしを支えるサードプレイスです」。

書店、カフェ、宿に続き、銭湯を引き継いだことで、栞日は街のハブのような存在へと変化していった。誰かの居場所がひとつ増えるたび、街は少しずつ豊かな表情を帯びていく。

親子三代、百年以上にわたり続く銭湯「菊の湯」。栞日が継承してカフェ利用の若い世代も訪れるように

未来 10年後の街の風景を今、どう描いているか

栞日が松本に根づいて10年以上。菊地さんの視線は、すでに〝これからの街〟へ向いている。「街はつくるものではなく、結果的にできあがるもの。これからも誰かの居場所をつくり続けていきたいですね」と語る。書店、カフェ、宿、ギャラリー、銭湯——異なる業態を束ねてきたのは、〝街の暮らしを支えるサードプレイス〟というひとつの思想だ。その思想はこれからも、静かに、しかし確実に広がっていく。

「10年後の松本がどうなっているかは、わからない。でも、この街に求められているサードプレイスをその時々のかたちでつくっていけたら。誰かが〝やってみたい〟と動き出した時、その挑戦が自然に根づくような土壌はつくっておきたい」。街の表情は少しずつ変わっていくだろう。栞日はその変化を受け止め、そっと寄り添う存在であり続ける。

カフェ2階には菊地さんがセレクトした独立出版の本たちがずらり。個性豊かな本と珈琲に魅せられた常連客も多い

新たな地域拠点づくりのヒント

- 書店、カフェ、宿、ギャラリー、銭湯。栞日のように業態にとらわれず、“街の暮らしを支えるサードプレイスをつくる”という考え方が拠点の広がりを生む。
- 100年以上続く銭湯「菊の湯」の継承のように、街の中にある大切なものを受け継ぎ、未来へつなぐこと。新しくつくることだけがすべてではない。

Case 03

海辺で、人と街がふっと混ざり合う 小さなカフェが新たな交流の場に

香川県・三豊市
宗一郎珈琲（ソウイチロウコーヒー）

宗一郎さんのはじける笑顔ロゴが印象的な「宗一郎珈琲」。地元の人にも旅行者にも立ち寄りやすい存在に

香川県三豊市仁尾町。瀬戸内の海に面した父母ヶ浜は、ボリビアのウユニ塩湖のような写真が撮れると2016年頃からSNSで話題に。全国から多くの人が訪れる人気スポットとなり、観光客は年間5000人ほどから約50万人へと急増した。

「写真だけ撮影して帰るのではもったいない。この土地のことを少しでも知ってもらえるきっかけをつくりたいと思いました」と話すのは、オーナーの今川宗一郎さん。生まれも育ちも仁尾町で、家業のスーパーを通して地元の暮らしと人の流れを見つめてきた。

気軽に立ち寄れて、地元と観光客をつなぐ場をつくりたい——。そんな思いから2019年、父母ヶ浜に「宗一郎珈琲」を立ち上げた。「僕はコーヒーの専門家じゃない。でも、人が集まる場はつくれる」。その言葉どおり、オープンしたコミュニケーションコーヒースタンドは、観光客と地元の人が自然に交わる〝小さな交流拠点〟として育っていった。

今川さんは、これから先の目標をあえて決めていないという。「10年前、今の自分なんて想像していなかった。だから10年後も、想像しない方がおもしろいんです」と笑う。

変わらないのは、自分たちの街と日常をもっと楽しくしたいという思いだ。宗一郎珈琲もそのひとつ。それだけにとどまらず、地元に自分たちがほしいと思う店をつくり続けている。焼き鳥店、寿司店、カラオケパブ…。それぞれが小さな拠点となり、街の暮らしに新しい選択肢を増やしていく。「僕はこの街が本当に好き。だからこの街のためになることは全部やりたいと思う」。今や〝日本のウユニ塩湖〟として人気観光名所となった「父母ヶ浜」だけではなく、仁尾町としての魅力をもっと広げていきたい。今川さんの発想と挑戦、そして行動力が、これからの仁尾町を変えていくのかもしれない。

栃木の「日光珈琲」や兵庫の「城崎珈琲焙煎所」から厳選した特製コーヒー豆を使用

父母ヶ浜の塩を使った塩カフェオレ。今川さんが長崎県の対馬のカフェを訪れた際にヒントを得たメニュー

赤→きれいな浜に、白→三豊を知りたい…など5色のカップを選ぶことで、父母ヶ浜の未来を選ぶ関係者になれる

約1km のロングビーチを誇る穏やかな父母ヶ浜。潮が引く夕暮れには水面が鏡のように輝き、幻想的な絶景に（写真PIXTA）

日本初のコミュニケーションコーヒースタンド。「街と観光客の距離を縮めてお互いにとっていい関係になれたら」と今川さん

㊟香川県三豊市仁尾町仁尾乙
㊒14:00-日の入りまで ㊡不定休

新たな地域拠点づくりのヒント

●コミュニケーションコーヒースタンドが地域を知って帰るきっかけづくりに。観光と暮らしの間に柔らかな接点を置く発想。
●「この街にこんな場所があれば」という視点と実行力。等身大のまま始めることで、地域に自然となじんでいく。
●未来を決めつけず、動きながら街の形をつくる。

Case 04

小さな商いを復活させる、それが東彼杵町のまちづくりのカギになる

長崎県・東彼杵町
Sorrisoriso（ソリッソリソ）千綿第三瀬戸米倉庫

1号室にあるコーヒースタンド「Tsubamecoffee」。東彼杵町の名物「そのぎ茶」をアレンジしたメニューの数々をいただける

長崎県東彼杵町は人口約7300人の小さな町。かつては酒店や米穀店、洋服店などの小さな商いが並び、文化や営みが息づく場所だった。

しかし時代の流れとともに店は次々と廃業、街から〝営みの灯〟が消えつつあった。「Sorrisoriso」を運営する森一峻さんの実家も酒店からコンビニへと転換。高校卒業後、東京勤務を経てUターンした森さんは、町の個性が失われていく現実を痛感したという。

そんな折、2013年に耳にしたのが農協の「千綿第三瀬戸米倉庫」解体の話だった。「このまま何もなくなるのを見ているだけでいいのか。小さな商いがもう一度生まれる〝最初の一歩〟をつくれるはず」。森さんは行政や農協に企画書を持ち込み、1年がかりで活用の許可を得るまで粘り強く交渉を続けた。仲間たちと一緒に壁を塗り、棚をつくり、飾りを加えていくうちに、倉庫は少しずつ、地域の場所へと姿を変えていった。

2015年に集合型店舗「Sorrisoriso千綿第三瀬戸米倉庫」をオープン。3店舗からのスタートだったが、生花店、ベーカリー、雑貨店など、小さな生業が次々と生まれ千綿には新しい人の流れが生まれた。森さん、そして一緒に活動してきた仲間たちの思いと活動が共感を呼び、人をつなぎ、わずか5年で20店以上が開業した。

目指しているのは、「能動の火」を持つ人が増えていくこと。次の誰かが新しい営みを起こし、また次の誰かへと火が渡っていく。そんな循環が生まれることが、千綿の未来につながると森さんは考えている。「保守的な町だからこその難しさもあるけど、意思を持って動く人やつくる人を増やしたい」と森さん。その思いが、これからの千綿の風景に新しい風をもたらすだろう。

「東彼杵町」の観光名物をつくろうと生まれたブランド「CHANOKO」。そのぎ茶に合う、くじら最中を考案した

2号室の「OSOTOYA米饋室」。お米料理をメインに懐かしのお惣菜や定食がいただける

そのぎほうじ茶の量り売りや焙煎体験ができる「くじらの髭」。体験型観光拠点施設の役割を担う

米倉庫の片づけからはじまったリノベーション。Sorrisorisoはイタリア語で“微笑みの米”を意味する

集合型店舗「Sorrisoriso（ソリッソリソ）千綿第三瀬戸米倉庫」。現在は茶葉のセレクトショップやカフェなど体験型観光の交流拠点として賑わう。開業を希望する自営業者へスペースの貸し出しも

㊟長崎県東彼杵郡東彼杵町瀬戸郷1303-1
☎0957-20-1883 ㊒10:00-18:00 ㊡火曜、水曜

新たな地域拠点づくりのヒント

●埋もれてしまっている町の文化や特産に着目。小さな商いが再び芽を出す土壌をつくり、地域再生の起点に。
●解体寸前の米倉庫を再生。地域に眠る資源を“未来の器”として活かす発想が鍵になる。
●一店舗ではなく小さな生業が連鎖する“パッチワーク型”のまちづくり。多様な営みが重なり合うことが大切。